「触れた者は皆いやされた」

マルコによる福音書６章：５３－５６

森島　牧人　牧師

今日の聖書箇所は、前回の「湖の上を歩く」の続きで「ゲネサレトで病人をいやす」という小見出しが付いています。主イエスが湖の上を歩いて弟子たちの舟に乗り、風を沈められたという出来事の後で、聖書は「一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。・・・」（マルコ６：５４－５５）と続いています。今まで何度も読んだり聞いたりした主の日常がまとめられているようで、これと言って目新しいものはなさそうに思ってしまう私たちですが、やはりこの箇所にも大切な意味があるのです。

聖書の中の主イエスの宣教活動の場面を読んでいますと、そのすべての場面が劇的であることが分かります。主イエスには、私たち人間のように、これと言ってすることもないありふれた日常というものはありませんでした。劇的な場面の連続、主にとってはそれこそが平凡な日常だったのです。主イエスの日々は見失われている人々を捜し出し、その痛みや苦しみに寄り添ってそれを癒し、その人々の生活を新たにすることでした。それは、いずれも奇跡を伴う劇的な展開となり、それによって主の名は広く知られて行ったのです。

このような劇的な日々の積み重ねが、主イエスを徐々に十字架に近づけることとなって行きます。言い換えれば、この日々の積み重ねがなければ、主の十字架上の死はなかったということです。そのことを私たち人間は、主イエスの復活によって知らされることとなりました。主の地上でのご生涯が、どのような意味を持つものであったか、主と十字架はどのような関係にあったかを、主の復活によって初めて理解し、私たち人間が贖罪という主の愛によって神の支配の中に置いていただけることになったと知ったのです。この「知る」ということ、私たち人間には限界があり、「知っている」つもりでも、確かかどうかわかりません。「知る・理解する」が可能になるのは、私たち人間の知識・経験が聖書の光によって照らされるその時、同時に、私たちの真の姿が露わになるということになるのです。

さて、今日の聖書から知らされること、それは、主イエスの全体像であり、主イエスという存在の意味です。主イエスをめぐる人間たち、ファリサイ派の人々は律法において、祭司長らは秩序において主を捉えようとしました。一方、異邦人を含む群衆は現世的な利益という欲望の中に、主イエスを捉えて殺到したのです。律法も秩序も持たず、信仰も未成熟で何も理解していない、そんな身勝手な彼らが、ひたむきに、切実に主を求めたのでした。聖書には「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせて欲しいと願った。」（同６：５６）とあります。せめて主イエスという存在のほんの端っこにでも触れることが出来たら、そうすれば・・・という彼らの信仰。主イエスは、末端というべき多くの人々のこの願いと祈りを、そのまま受け入れられたのでした。聖書記者は「触れた者は皆いやされた。」と結んでいます。主イエスが地上に降りて来られたのは、このためにあったのです。

「触れた者は皆いやされる」、この中に真の礼拝があります。主との出会いを願った全員が主と出会い、そして、皆いやされる・・・これが礼拝を捧げるということです。

（説教要約　羽入田悦子）